



第 28 号

あざみ 祥子
KCCN 理事

子どもの食堂ができますよ

ちゃんとしたお昼ご飯を食べさせたい

「子ども食堂を作りますよ」と私の学区の民生委員さんから聞かされてちょっと複雑。なるとなればつい一か月前まで、できるはずありませんとけんもほろろの応答だったのだから。でも、全国的にはちらほらニュースにもなっていて、ついにお隣の学区で始まったことだしやっとその気になったかと、そして、できる見通しが立ったのだと安堵してうれしかった。いつできるかは定かではないがそんなに遠くはあるまい。

子ども食堂を私が提唱したのは今から 10 数年前の事。当時小学校に土曜日休校という制度が導入された。お父さんお母さんの職場はまだ、土曜日が休みという状態ではない時に、早々と小学校に導入されたのである。私の事だから、じゃあ、土曜日のお昼はどうするの？というもの。当時から学校給食でバランスをとっている子どもが結構いたのである。しかし、ちょうどそのころ私はお年寄りの配食サービスを立ち上げたばかりで手いっぱいだったから、皆さんからそこまで手が回らんよと言われれば一人でどうすることもできず静観するばかりだった。その後コンビニなどでパンやおにぎり、お弁当なども売られるようになり、まあ何とかかなるか、そういえばこれまでも、土曜日の給食はなかったよなーとあきらめつつ、しかし、ことあるごとに言うので皆さんあきれ返っていたようである。ところが、今になってこの問題が急浮上したのは「子どもの貧困」が社会問題化してきたためであろう。

子どもの貧困率～世界で最下位

「厚生労働省が 2014 年 7 月 15 日にまとめた国民生活基礎調査で、平均的な所得の半分を下回る世帯で暮らす 18 歳未満の子供の割合を示す「子どもの貧困率」が 2012 年、16, 3%と過去最悪を更新した。子どものうち 6 人に一人が貧困ということである。同省は母子世帯が増えており働く母親の多くが非正規雇用であることも影響したのでは、と指摘している（日経新聞 2014 年 7 月 16 日）」という。3 年前の 2009 年調査でもひとり親の貧困率は 50, 8%と抜きんでいて、当時も OECD34 か国中最下位と警鐘が鳴らされていた。相対的貧困率と言われるとわかりにくいだが、要するに中央値＝貧困線 122 万円、それ以下の子育て世帯が一学級に平均 5 人ほどの割合にいるということである。別名格差社会と言われる。

子供の貧困とは何か

貧困とは何であろう。思えば人類は貧困との戦いの歴史でもあるから少しずつよくなって

いって当たり前で、いわゆる絶対的貧困は少なくとも日本では当然減っていると多くの人が認識していた。だから相対的貧困と言われても、ピンとこない。格差社会は個人の努力の問題または考え方の問題とってしまう。ところがどうもそうではないようだ。私だっていつ離婚するかわからない。好景気と言われてもいつまで仕事にありつけるか、家族の一人が病に倒れたら、あるいは介護しなければならぬ年寄りが頼ってきたら等々、私たちはとても不安な状態にいる。決して良くなってきているとは思えないのである。特に子どもはナイーブだから第一に社会の矛盾の前で様々な問題行動に直面する。いわく、虐待、いじめ、ひきこもり、不登校、自殺等など。決してこれらは貧困層が引き起こしているとは言えないが、この矛盾に満ちた生きにくさが多くの子どもの追いつめているのではないかと思う。その意味で、子どもの貧困率は我々すべての生活者の問題としてとらえるべきで、私たちみんなの生活をもっと安定させねばならないという目に見える指標として突きつけられているのである。

待機児童をなくしてほしい

とりあえず社会的支援・投資は急務である。保育園に入園させたくても施設が足りないということで昨今ママたちが声をあげだしたのは素晴らしい。しかし、3月25日政府与党がまとめた「待機児童問題緊急提言」を見てアッと驚いた。いくら「保育園落ちた日本死ね！」のブログがきっかけとはいえ、また緊急対策とはいえ、財源の当てもなく、規制を緩めて今の施設で受け皿を広げるといえるのはいかがなものか。少しでも安心安全で良質の保育をしたい、受けさせたいと関係者が日夜努力して保育士を増やしたり、遊ぶ空間を広げたりしてきたことを、まるで評価していない。悪意を感じるといった人もあるが、少なくともママたちの不安をちっともわかろうとしていない。

しかしこのまま、事態は進んでいくのだろうか。私たち適格消費者団体の出番が来ることを恐れる。

里親にはなれないけれど

ここ数年私は空きの巣症候群としか言いようのない毎日を送っていた。子育てが終わってなんとも寂しいのである。そこで思い立って里親に立候補した。周りから、無理でしょ、と笑われたけれどせっせと資料を取り寄せ関係機関を訪れて相談をした。結局駄目。子どもにも親を選ぶ権利はある。たとえば危険に遭遇したとき子どもをひっかかえて逃げ出す体力は残念ながら私にはもうない。ホームステイはどう？大学生を下宿させては？などのご助言も今となっては遅すぎる。ひとえに里親としての質の問題である。

そんな折に再び現れた子どもの食堂構想。どんなものになろうと私は歓迎したい。だれでもおいで！炊き立ての手作りのご飯を一緒に食べる、それだけでよい。ついでに一緒に作ろう、一緒に遊ぼう、一緒におしゃべりしよう。きっと子どもたちが抱えている小さな、しかし、とても大きな不安はちょっとぐらい解消されていくのではないかと思う。里親にはなれなかったけれど、そばにいて相槌を打ってくれる大人の一人として私も参加したい。

子どもはとても、とてもかわいいのです。

(2016年4月)